



TITLE:

スタンダード論<<Le naturel>>をめぐって作品論その一「赤と黒」

AUTHOR(S):

佃, 裕文

CITATION:

佃, 裕文. スタンダード論<<Le naturel>>をめぐって作品論その一「赤と黒」. 仏文研究 1979, 7: 93-122

ISSUE DATE:

1979-06-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137628>

RIGHT:

スタンダール論 《le naturel》をめぐって

作品論 その一「赤と黒」

京都大学文学部
フランス文学研究科 佃 裕 文
博士課程三年

序

《le naturel》(自然らしさ)というのがスタンダールの人生と芸術を貫く理想美であることは、スタンダールの作品にその証拠が散見されるのは勿論、多くの研究者たち(最近ではP.-G.カステックス等)によっても指摘されている。なかでもアルベレス(F.M.Alberes)の労作《Le Naturel chez Stendhal》は注目すべき研究である。

アルベレスはスタンダールを「モラリスト」としてとらえ、彼の青年時代の哲学の研究(主にIdéologuesの哲学)から創作活動にいたるまでの精神の軌跡を、《le naturel》の観点から綿密に跡づけ、そののち小説創造を通じスタンダールがいかなる追求を行ったかを分析している。スタンダールの日記・書簡、《Pensées》、旅行記等まで資料を漁るのみならず、Idéologuesの哲学書、スタンダールの愛読した自伝作家にいたるまで微細な観察を行っている。

しかしわれわれはそのような多大の労苦に対し敬意を表しながらも、以下の二点についてはいささか不満を覚える。

- 1) スタンダールは「恋愛論」32章において、《le naturel》の説明を行っているが、アルベレスは自分の研究とこの記述との関係について触れていない。このスタンダールの説明はかなり具体的なもので、彼における《le naturel》という言葉の意味を十全に理解しようとする場合には、欠かすことができないと思われる。
- 2) アルベレスの研究はスタンダールの精神の軌跡をたどることに主眼がおかれ、個々の作品、特に小説作品を一個の独立した「宇宙」としてとらえ、その内包する固有の問題にまで分析をすすめるといった扱いをしていない。

われわれの考えではアルベレスの研究により、スタンダールにおける《le naturel》という言葉の持つ重要な意味は決定的に解明されたのであり、その解明にもとずいて、われわれはアルベレスとは別個にスタンダールの小説の分析を行うのである。そして上述の弱点をアルベレスの研究が持つ以上、われわれの研究にも何がしかの価値はあるかもしれない。

ところで《le naturel》という言葉の定義についてであるが、それはスタンダール自身が打ち明けているように、きわめて困難な仕事である。われわれとしてはむしろ、スタンダール自身の《le naturel》の説明によっておおよその内容をつかみ、作品そのものの中でどのような性格を持つ《le naturel》が追求されているのか観察する方法をとりたい。この方法によれば、スタンダールの追求する《le naturel》がいかなるものかあらかじめ明瞭な定義を与えられるのではなく、作品の分析そのものを通じて輪郭は浮かび上がってゆく。

けれどもあらかじめこの《le naturel》という言葉のおよその内容を知っておくことは必要である。スタンダールは「恋愛論」32章において次のように書いている。

On appelle naturel ce qui ne s'écarte pas de la manière habituel d'agir. Il va sans dire qu'il ne faut jamais non seulement mentir à ce qu'on aime, mais même embellir le moins du monde et altérer la pureté de trait de la vérité. Car si l'on embellit, l'attention est occupée à embellir, et ne répond plus naïvement, comme la touche d'un piano, au sentiment qui se montre dans ses yeux. (……)/(……) naturel et habituel sont deux choses. Si l'on prend ces mots dans le même sens, il est difficile d'être naturel, (……)/(……) il ne faut pas prétendre à la candeur, cette qualité d'une âme qui ne fait aucun retour sur elle-même. (……)

(＊ここでは文脈から la candeur＝le naturelと考えてよい)

無論この箇所においては、スタンダールは恋愛における《le naturel》を考えているのだが、ここでの説明はもっと大きなひろがり——生き方そのものの次元にまで拡大して考えることは許されるであろう。しかしそれにしても、スタンダールのこの記述だけでは、われわれの分析はきわめてあいまいなものに終わる危険がある。

ところで、ヴァレリイの「スタンダール論」の中に次のような内容の文章がある。すなわち、われわれおのおのの人間のうちにはふたりの人物が住んでおり、一方は《l'insulaire naïf》、他方は《l'amant de la gloire》である。そしてこの両者は次のような性質を持つという。

(……) L'un nous excite à solliciter, à forcer, à séduire les esprits au hasard. L'autre jalousement nous rappelle à notre solitude et étrangeté irréductibles. L'un nous pousse à paraître et l'autre nous anime à être, et à nous confirmer dans l'être. (……)

ヴァレリイによれば人生というものはこのふたりの人物のドラマとして存在し、このふたりの人物のうち《l'insulaire naïf》に依拠する生き方が《naturel》ということになる。逆に《l'amant de la gloire》に依拠する生き方は、《anti-naturel》ということになろう。

さてこのヴァレリイの見方が、スタンダールのそれとどこまで厳密に一致するものかは明確に出来ないが、ヴァレリイの見方はそれをほとんど損うことなしに——そして多少それを損うことがあったとしても、われわれの目的にとって有益であるのには変わらないが——スタンダールの《la naturel》の見方と同一化しようと思われる。あるいは多少の喰い違いはあったとしても、スタンダールの「恋愛論」中の見方に合わせてヴァレリイのこめようとした内容を多少変えて彼の上述の言葉を利用することは許されよう。ちなみにヴァレリイはスタンダールの「恋愛論」の説明をまったく知らなかったか、あるいはほとんど念頭においていなかったと思われるものの、スタンダールの記述を知ったならば自分の説明を、われわれが欲するようにスタンダールのそれと同一化しようとしたであろう。

ここでわれわれの共通の理解を今いちど確認しておく。われわれはスタンダールにおける《le naturel》を、あらかじめ厳密な定義を行った末にではなく、そのおよその内容を把握したあとむしろ、作品そのものを通じて明確にしてゆくやり方をとること、そしてその際スタンダールの「恋愛論」32章の説明、またスタンダールのこの説明からするヴァレリイの考察の利用を前提とすること。最後にはわれわれのこのような作業はあくまでアルベレスの研究の成果の上に可能なのであり、しかもその弱点をむしろ補う、そういう意味を持つだろうこと、以上である。

上の前提のもとに、われわれはまずその分析の対象として最初に「赤と黒」を選び、次の順序で観察することとした。

まず第一章では《naturel》な人物と形容しうる三種の人物から見たジュリアン像を検討することで、ジュリアンの性格を把握し、つづいて2章、3章とそれぞれ《le naturel》、《l'anti-naturel》の典型であるふたりの女主人公とジュリアンの恋の性質について、第4章では牢獄で可能な限り《le naturel》を追求するジュリアンを、「死」・「神」・「英雄主義」の三つの項目に分けて観察する。

第一章 ジュリアンと三種の人物

C'était la destinée de Napoléon, serait-ce un jour la sienne ? (60)

「赤と黒」の主人公ジュリアンは、豊かな感受性、鋭利な理性、堅固な意志を持っていたが、社会階層としては最下層の出身であり、彼の目指す幸福からは最も遠い距離にあった。この青年が幸福を獲得するためには、野心を抱き、純粋に自己の才能と意志によって道を切り拓かねばならなかった。すなわち彼は1830年代のナポレオンであった。

しかし大革命を経験したフランスはナポレオンの没落後、いわゆる王政復古（Restauration）の時代を迎え、革命の再発を恐れる帰国亡命貴族たちは、イエズス会僧侶の修道会と結託し、強烈な反動政策を展開していた。修道会の監視の網の目はフランス全土をおおい、偽善はパリにも地方にもはびこった。フランスはこのときほど、僧侶の権力が幅を利かせたときもなかった。

このような状況の中で、立身出世を望むジュリアンはいちはやく「現代流の軍服」である僧服をまとう準備を始める。彼のひそかな聖典はルソーの「告白」、ナポレオンの「セント・ヘレナ日記」等であったが、さっそくラテン語の「新約聖書」、メストルの「法王論」を、どちらも一切信じないのにもかかわらず暗記するのである。

ところでジュリアンに関する形容で《sombre》という単語、もしくはこれに類似の表現の使われるのが、しばしば眼にされる。たとえばシェランの《une ardeur sombre》という指摘、レナル夫人の《Il est des moments où je crois n'avoir

jamais lu jusqu'au fond de ton âme.》という言葉、あるいはラ・モール侯爵の《Je ne sais pas encore ce que c'est que votre Julien》《(…) au fond de ce caractère je trouve quelque chose d'effrayant》という発言。

これらの表現はジュリアンの性格を考える上で決して見逃せない。王政復古という社会状況の中では、ジュリアンのような平民出身の青年の立身出世の野心は全社会に対する反抗を意味し、従ってそれは隠されねばならなかったのである。

しかし同時にジュリアンは、ひとりきりになったとき、「野心」から来る偽善の必要のないときには、心ゆくまで夢想にふけったり、美しい自然や恋人の衣裳戸棚に見とれたりする。さらには食事に招待され、その席でヴァルノ貧民収容所長が貧民たちの歌が騒々しいといってやめさせたのを知り、涙をこぼしたり、あるいは百姓車にひかれた犬の話に高笑いするレナール町長に、眉をひそめたりする。

このようにわれわれはジュリアンの性格に二重性を見る。すなわち「偽善家」としてのジュリアンと高貴な魂と豊かな感受性を見せる純粹無垢なジュリアンと、ふたりのジュリアンを見る。すなわち彼は《le naturel》と《l'anti-naturel》の両面をそなえている。アルベレスの言葉を借りれば、ジュリアンは《le naturel déguisé》である。

ところでスタンダールの他の小説においてもそうであるが「赤と黒」の場合も、登場人物たちはジュリアンは無論、レナール夫人、マチルド、そしてたとえばソレル老人にしろ、ヴァルノにしろ、皆幸福を自己の力で獲得しようとする積極的な人間である。ソレル老人は息子のジュリアンを家庭教師にしようとしてやって来たレナール町長を相手に、抜け目なく少しでも有利な条件で取り引きしようとするし、ヴァルノも修道会の力を借りて、まんまとレナールを町長の椅子から追い出すのである。

彼らはその求める幸福が町長の椅子であろうが一ヶ月何フランかの金であろうが、彼らに精一杯の知恵と力を尽くして、状況を冷静に見さだめ、一步でもそれに近づこうとする。スタンダールは彼自身が嫌っている人物にさえこのように積極的な意志を与え、ひとりひとりの人物を躍動させている。そしてそれはジョルジュ・ブランが「視野の制限」(les restrictions de champ)と名づけたスタンダールの、人物の観点を主体とする独特な描写法(《Stendhal et les problèmes du

Roman》オⅡ部）によって、いっそう興味深くされている。

ところでわれわれは主人公ジュリアンが、これらさまざまな人物の眼に、相異なるさまざまな像を結んでいるのを知っている。それらの人物のうちのある者は、ジュリアンを自分の利害と結びつけてしか見ず、また他の者は彼に愛情や友情をもって見ている。前者はジュリアンを《l'amant de la gloire》の眼でしか見ず、後者は多かれ少かれ彼を《l'insulaire naïf》の眼で見ている。前者は《anti-naturel》な人物たち、後者は《naturel》な人物たちと、大ざっぱに考えられる。そして後者の人物として、シェラン司祭・ピラル師、フーケ、アルタミラなどがいる。

スタンダールによれば「小説は大道に沿って持ち歩く鏡」であるが、これらの人物はジュリアンの真の姿を映し出す幾つかの「鏡」となっており、これらの「鏡」に映った像を観察することで、ジュリアンの性格は一層明らかにされるだろう。

ところでこれら三種の人物たちはそれぞれ、師・親友・同士としてジュリアンに対する。

まずシェラン司祭・ピラル師であるが、ふたりはジュリアンの勤勉、知力、精力を評価し、厳格なジャンセニストとして彼に教育を施す。シェランが彼に叩き込んだのは、「正しい推論と無意味な言葉にごまかされぬ習慣」であり、ピラルの教育方針はジュリアンが自力でさまざまな困難を打破してゆくように仕向けるにあった。彼らの教育は、明らかにジュリアンの人生を支配し、彼にまよかしの議論やいつわりの原因にとらわれぬ態度をつらぬかせた。

さてシェランとピラルはさまざまな点でジュリアンを評価しているものの、彼が貧しい階層の出身にもかかわらず、きわめて感じやすい自尊心を持ち、信仰と結びつかぬ《une ardeur sombre》を抱いているのを不安に思っていた。ジュリアンが世俗の人間ならまだしも、僧職で身を立てようとしている以上、そのような「熱情」は「救い」の障害となるだろうからである。

こうしてわれわれは彼らと比較することでジュリアンの無信仰にもっとも注目せざるを得ない。そして特に牢獄でのジュリアンと彼らとを比較し図式化すれば神を持つ《le naturel》と神を持たない《le naturel》という対立を得る。

I部Ⅱ部を通じてジュリアンはシェラン、ピラルのような良心と信仰にのみもとづいて生きてゆくジャンセニストたちには共鳴しているが、おおむねは信仰が利害と結びつく例しか見ない。彼はナポレオンの熱愛から意志の強さを学び、むしろ人間の意志の力を絶対化していた。彼は最初からして信仰なぞ持とうとは

しなかったのである。

L'idée la plus utile aux tyrans est celle de Dieu. (265)

これが彼の神について抱いている思想の一切であった。

さてジュリアンに親友として厚い友情を最後までささげる人物として、淋しい寒村で孤独にうちのめされながら材木商をいとなむ堅実な生活者フーケをあげることができる。

彼はジュリアンの頭としっかりした性格を見込み、一緒に仕事をしないかとすすめるが、己れの才能と意志によって輝かしい幸福を獲得することを夢想しているジュリアンは、その申し出を受け入れようとはしない。

にもかかわらずフーケは神学校のジュリアンに鹿と野猪の差し入れをしたり、牢獄に入ったジュリアンの救出のために犠牲的な奔走をするのである。ジュリアンもフーケの気高い友情に心から感動させられる。

しかしフーケとジュリアンの相違は、生活に対する姿勢にも明らかであるが、強欲で獄中の息子ジュリアンから養育料を取ろうとさえするソレル老人をめぐる、ふたりの態度にもっともよくあらわれている。

牢獄のジュリアンが自分の父親には会いたくないと言ったとき、フーケはこう思った。

(……) Cette horreur pour la vue d'un père, et dans un tel moment, choqua profondément le coeur honnête et bourgeois du marchand de bois. / Il crut comprendre pourquoi tant de gens haïssaient passionément son ami. (……) (443)

このようなフーケにジュリアンは《la petitesse d'esprit d'un bourgeois de campagne》を見ている。ジュリアンの場合は、フーケのように世間の道徳や慣習に従順ではなく、たとえそれに従っているときでもあくまで自己の情熱と意志に最大の価値をおく。

フーケの生活は堅実ではあるが、彼には情熱のほとばしりは理解できないであろう。そしてそれは第四章でも述べるジュリアンの《l'héroïsme》をフーケが持

たぬことを意味する。

最後にわれわれはナポリ出身のジャンセニストにして自由主義者、アルタミラ伯爵の眼に映ったジュリアンを見なければならない。

アルタミラは死刑宣告も受けたことのあるイタリア人革命家として、パリの状況を鋭く把握している。彼はこの十九世紀にはもはや真の情熱 (passions véritables) は存在しないと言う。

しかし彼の眼にはジュリアンはきわめて自分に近い人物と映っていた。アルタミラはジュリアンに次のように言う。

Vous n'avez pas la légèreté française, et comprenez le principe de l'utilité(282)

「恋愛論」をはじめあちこちでスタンダールは、イタリア人の理想美は《le naturel》である、彼らは情熱を解すると述べているが、そのイタリア人アルタミラの上述の言葉は、ジュリアンの性格を的確に把握している。

それではこのように「赤と黒」の登場人物の中でも、きわめて類似の性格を有する彼らに相違はないのか。

アルタミラは自分を「血なまぐさいジャコバン」と言い、ジュリアンをさして「平民の身分で上流社会にわりこんできた男」と呼ぶ。そこにはのちに彼がジュリアンを「われわれの仲間」(des nôtres) と言うにいたる、革命の同志の分つような連帯感がすでに働いている。

しかし現実のジュリアンは、アルタミラの革命を目指すような政治性とは無縁である。彼はあくまで個人としての幸福を追求しつづけるのであり、集団の一員として自己を規定する方向には進まない。

ところで彼らふたりは《l'héroïsme》の点でも類似するが、ここでもやはりアルタミラのそれは革命的政治的の様相を帯び、ジュリアンの場合はきわめて個人的な、自己追求の様相の下にあらわれる。

以上のことと、たとえばジュリアンの次の一節のような瞬間を考え合わせると、アルタミラの政治的《l'héroïsme》に対しジュリアンの芸術家的《l'héroïsme》という図式が浮かび上がる。

(……) l'âme de Julien, exaltée par ces sons (de la cloche) si mâles et si pleins, errait dans les espaces imaginaires. Jamais il ne fera ni un bon prêtre, ni un grand administrateur. Les âmes qui s'émeuvent ainisi sont bonnes tout au plus à produire un artiste. (……) (184, 185)

さてわれわれは以上三種の人物とジュリアンの比較を通じて、ジュリアンの《le naturel》を次のように特徴づけておくことができよう。

- 1) ジュリアンは「神を持たない《le naturel》」である。
- 2) 彼の《le naturel》は世間の道徳・慣習を超越し、《l'héroïsme》の様相を帯びている。
- 3) 彼の《l'héroïsme》は「芸術家」としてのそれである。

ところでこのようなジュリアンの《le naturel》は第四章で真の開花を見るが、レナール邸時代（第二章）、本論文では除外された神学校時代、パリのラ・モール邸時代（第三章）を通じ、「野心」のゆえに《anti-naturel》な生き方をせねばならなかった。その結果、ひとりきりでいるときや偽善の必要のないときを除き、僧職で身を立てようと志す信仰篤い、才能ある、誇り高い、模範的な青年として人々の眼には映ったはずである。

さてジュリアンと彼がその心を征服するふたりの女主人公のドラマの分析にとりかかる前に、ジュリアンの「野心」の意味を正確に理解しておかねばならない。

この章の最初でも述べたように、ジュリアンは才能がありながらも卑しい身分のゆえに彼の望む幸福からは遠く隔てられていた。そのような状況で精力ある優秀な青年が「野心」を抱くのは当然である。間違っているのは、大革命の「自由」「平等」の理念を葬りさろうとしていた社会である。

しかも青年が己れの才能と精力を傾注する対象を持つことは、これはさまざまな意味でよいことである。

ジュリアンが野心の目標に突進してゆくところは、大空高く悠々と舞っていた猛禽が、遙か眼下に獲物を見つけ、それに向って直線的に急降下してゆくのに似ている。われわれはまずをその敏速な、果敢な、正確な動きを味うのでなければならない。「赤と黒」という小説は、スタンダールの作品の中でも、とりわけ精悍な青年の意志のロマンであるからだ。そしてジュリアンという猛禽は立身という獲物を手に入れたあとは、地上を去り、死という絶対の宇宙に向けて《le naturel》

の美しい軌跡を描きながら飛び立つのである。

「赤と黒」は「パルムの僧院」と比べ暗いというので嫌う読者が多いが、それはジュリアンのこの猛禽のような正確無比の、敏速な、美しい運動を味うだけの生氣ある精神を持たぬためである。

《cartésien》にして「意志」の哲学者であったアランは、この二冊の小説のうちどちらが好きかと尋ねられたら、一番最後に読んだ方だと答えるのをつねとしていた（《Stendhal》）。

スタンダールを愛する者は、「赤と黒」のおもしろさをまず知る者でなければならない。

第二章 レナール夫人との恋

アランの弟子モーロワは、この自然の失われた殺伐たる時代では、男は女性の中に宇宙や自然を求めるのだと言っているが（《L'Art d'Aimer》）、われわれはジュリアン——とくに牢獄のジュリアンとともに「赤と黒」第Ⅰ部のヒロイン、レナール夫人の中にヴェリエールやヴェルジーの美しい自然を見い出す。第Ⅱ部のヒロイン、マチルドがいわば文明の結晶としての女性であるとするならば、レナール夫人は自然の結晶と言えよう。

莫大な財産家の伯母の跡取り娘である美しいルイーズは、若くしてヴェリエールの貴族レナール町長のもとに嫁ぎ、三人の子供をもうけた。彼女は自分の夫を最良の男性だと信じ、非の打ちどころのない従順をささげている。

ところで夫人の性格について見る前に、夫人を囲む田園の小都会ヴェリエールの精神的状況に触れねばならない。

ヴェリエールはその自然の美しさにもかかわらず、そこの住民の精神によって醜悪にされている。「もうけになる」(rapporter du revenu)——これが彼らの生活を動かす原理である。さらに悪辣な修道会の手がこの田園の小都会にも伸び、その力を借りて貧民収容所長ヴァルノ、助任司祭マスロンがそれぞれ、王党派の町長と司祭の椅子をねらっている。ナポレオンの没落以来、地方では偽善がはびこり、人々は免職を恐れ、上品な風習は失われていた。

ここには互いに相手を利害得失を通じてしか見ず、それを超えて物事に感動する魂はほとんど見られない。たとえばレナール町長は貴族でないという理由でふたりの幼な馴じみと友達付き合いを止め、貧民収容所長ヴァルノは食事の最中貧民の歌を禁じようとするのである。

このようにレナール夫人の周囲の状況は、物欲・虚栄心・偽善などという言葉に集約される。このような状況にあって夫人は聖心派の修道院の他の一切の教育は道理に合わぬので忘れたものの、そこで身につけた内面的な生活は守りつづけ、子供と神に自己の高貴な魂から湧く愛を献げ、しかし自己の苦悩は誰ひとり理解してもらえぬ孤高の生活を送っている。「苦悩が彼女を教育した」とスタンダーは書いている。こうして周囲の醜悪な精神から孤立することで、夫人は何の偽善も何の悪しき文明の影響もこうむらずに、無垢な魂を持ちつづけているのである。そしてこの自然の結晶のような女性も、やはり王政復古の政治状況が孤立を余儀なくさせたがゆえに、生まれたのである。

つまりわれわれは醜悪な《l'anti-naturel》の中に、その周囲の醜さのゆえにひっそり純化されざるを得なかった《le naturel》を見る。夫人はまさに物欲・虚栄心・偽善の海の只中にひっそりと浮かぶ孤島に住んでいたのであり、ヴァレリーのいう《l'insulaire naïf》という言葉が字義どおりにあてはまる。

さて、以上のような状況の中にジュリアンは請われて、レナール邸に家庭教師として入るのだが、われわれは彼と夫人の恋について分析する前に、まず彼にとって上流階級の婦人との恋がどんな意味を持っていたか考えねばならない。

ジュリアンの恋の対象——レナール夫人とマチルド——はその属する社会でもっとも有力な地位によって守られ、しかもその美貌、美德あるいは才知により、人々の羨望の的になっている。

ところで時代はナポレオンが活躍していた頃とは違い、戦争での武勲はもはや意味をなさず、ジュリアンは当時勢威をふるっていた僧職に立身の道を託すのだが、そこで意味を持つのはこれら上流階級の婦人たちとの恋だった。というのは、ひとつには恋人を通じて上流社会の隠されたさまざまな動きが分かったし、彼女らと結ばれることで身の安全と出世の保証が得られるからである。さらにジュリアンのような下層階級出身の青年には、それは上品な言葉づかい・物腰の優美さを身につけるよい機会ともなった。

こうしてジュリアンは愛を持たぬのにもかかわらず、上流階級の婦人に恋を仕

掛けることとなる。その結果、あの有名な「田園の一夜」の章にうかがえるように、恋愛はさながら戦場と化す。「赤と黒」の恋愛描写において戦争用語が頻出するのは、以上の理由によるのである。

ジュリアンは、時代が戦いの場所を心理の次元に移したことによって、偽善的態度《l'anti-naturel》を自在に扱えるように要請されたのである。彼の「野心」の実現は、こうして彼がいかに《l'anti-naturel》を自在に扱うるかに依存することになる。

しかしこのような試練は、多分に砂を噛むような忍耐を要求する。ジュリアンは次のようにつぶやく。

La volonté de l'homme est puissante, je le lis partout (……) La tâche des grands hommes a été facile ; quelque terrible que fût le danger, ils le trouvaient beau (……) (177)

乗り越えるべき「危険」の美しい時代に生まれていれば、ジュリアンの出世はナポレオンの場合のように迅速であったろう。しかし少くとも、彼が最初に征服すべきレナール夫人は、決して美しくない対象ではなかったはずである。

さてそのレナール夫人はジュリアンにとり、彼の二重性のゆえに二種類の人物として映っている。つまり、野心を抱く偽善家としてのジュリアンには「町長夫人」として、そして野心を忘れた素朴なジュリアンには「神と子供を愛するつつましい女」として。

これに対し夫人の眼には、ジュリアンはそのような分裂を生じない。夫人の眼にあらわれるジュリアンは、呼び鈴を鳴らすことさえできずに門口にたたずむ若い職人姿の彼である。ジュリアンは夫人の周囲のどこを探しても見当たらぬ人物だった。

(……) La générosité, la noblesse d'âme, l'humanité lui semblèrent peu à peu n'exister que chez ce jeune abbé (……) (36)

人生の経験のない夫人には、また恋愛の経験もありえず、さらにシェラン司祭からそれはこの上なく汚らしい、みだらなものだと教え込まれていたし、小説もほとんど読まず、たまたま読んだ小説に恋愛のことが書かれてあっても、それは不自然なことだとして信じなかった。

こうした恋愛に関する完全な無知と田園生活の万事に緩慢な調子が、彼女の恋愛をいっそう自然な (naturel) ものにした。彼女にとって恋のひとつひとつの段階は、新鮮な喜びと驚きに満ちていた。

(……) Tout était imprévu pour elle (……) (63)

そしてこの《l'imprévu》という性質こそ、《naturel》な恋愛——「情熱恋愛」の第一の特色なのである。

これに対しジュリアンには、最初から明らかな作為がある。彼が夫人に恋を仕掛けるのは、出世のあかつきに家庭教師なぞという卑しい職についたのは、恋のためだったと弁解できるようにするためなのである。恋を引き受けるのは、彼の《l'amant de la gloire》である。

このようなジュリアンを、スタンダールは次のように皮肉っている。

(……) laisser-aller, sans lequel l'amour n'est souvent que le plus ennuyeux des devoirs. (75)

しかしこんなジュリアンも、夫人が自分の恋愛感情を自覚し、相反するふたつの感情に引き裂かれ、深刻に苦悩するのを見ては心を打たれずにいらなかった。

彼女は「これまで生きたことはなかった」と思うほどの烈しい喜びと、「姦通」(l'adultère)という言葉が引き起こす暗黒な罪の念を感じなければならなかった。スタンダールの表現によれば、夫人の生活は「天国」(le ciel) と「地獄」(l'enfer) だった。

夫人の真率な感情は次第に、ジュリアンの《l'insulaire naïf》を感動さすようになる。

ここでわれわれは、レナール夫人という《l'insulaire naïf》にとって、「神」もしくは「道徳」がいかなるものであったかを考えなければならない。

夫人の一番下の子供、スタニスラス・グザヴィエが病氣になったとき、苦悩はもっとも熾烈になった。このときの夫人の心の状態はジュリアンの次の言葉に的確にとらえられている。

(……) Elle croit tuer son fils en m'aimant, et cependant la malheureuse m'aime plus que son fils (……) (108)

われわれは無邪気な子供のこんな例を見かける。——つまみ食いをするとうかが曲がってしまうよと聞かされている子供は、つまみ食いをしたあとしきりに鏡の中を覗くものである。そして少しでも口が曲がっているように見えると、許されざる天罰がくだったと思ひ込む。

レナール夫人の罪悪感もちょうどこの子供のそれに似ている。そして夫人に「つまみ食いをするとうかが曲がるよ」と言い含めたのは、ジュリアンに言わせれば「偽善家の坊主連中」なのである。

ジュリアンには美德も悪徳もない。彼には、アランの言うように「自然」を除いては、ただ人間の意志があるだけである。だから夫人の苦悩も、彼の眼には「偽善家の坊主連中」のこねあげたいかさまな罪の理論の罠にはまった結果なのである。このジュリアンの冷徹な精神は、次章でクロワズノワとの比較を通して、ふたたび取り扱うであろう。

しかし夫人の真率な苦悩はジュリアンの心を打つ。この最後の場面では、ジュリアンは夫人に真の愛を感じていたと言ってよいように思われる。けれども夫人の犠牲的な愛（夫人はジュリアンの罪をわが身にひき受け、あくまでジュリアンの出世を祈る）にジュリアンが真の情熱をもって応じるのは、彼が神学校、そしてパリと遍歴し、ついに「野心」を実現するが、たちまちそれが無残に破られたのちである。

奇妙なことにジュリアンの「野心」の道を鎖したのはレナール夫人で、その夫人をジュリアンは殺害しようとしたために、牢獄に入れられる。彼らふたりはこのような事件の中でも、結局固い愛によって結ばれていたのである。

ジュリアンは牢獄に入った後、《l'anti-naturel》を完全に克服し、純然たる《l'insulaire naïf》として生き始める。そのときレナール夫人の幻影は「尾白鷺」(l'orfraie)の鳴き声に切り裂かれる天守閣の夜のしじまに浮かぶのである。

(……) Il n'avait plus d'ambition. (……) Ses remords (……) lui présentaient souvent l'image de M^{me} de Rênal, surtout pendant le silence des nuits, troublé seulement, dans ce donjon élevé, par le chant de l'orfraie ! (438)

第三章 マチルドとの恋

ジュリアンはレナール邸時代、ヴェルジーの大山脈の頂上の岩穴からたそがれのブルゴーニュ、ボージョレの豊饒な平原を眺めつつ、パリで出会うはずの才知にたけた美貌の女性を夢想したものである。この夢想の女性こそは、ラ・モール侯爵の娘マチルドにおいて実現される。

スタンダールの傑作から政治を抜きとってみよ——全建築は崩壊すると言ったのはクロード・ロワ(《Stendhal par lui-même》)であるが、レナール夫人の恋もマチルドの恋も当時の政治的状況を念頭に置かずには考えられない。

マチルドーマルグリット・ド・ラ・モールは先祖に宗教戦争時代の悲劇の英雄ボニファス・ド・ラ・モールを持ち、《l'idéal de Paris》といわれ、財産・才知・美貌等なにひとつ欠けるところなく、社交界の女王として若い貴族たちに君臨している。

ところでこのマチルドをつつむ状況は独特である。アウエルバッハの述べるようにそこにいる人々は決して愚鈍ではなく、教養・機智・身分のそろった人物もいるのにもかかわらず、「退屈」の気分を感じさせずにいない。この「退屈」は王政復古時代の政治的・思想的状況に由来するのである。(「ミメーシス」)

われわれはこの状況を客観的に把握している三人の人物を知っている。それはジュリアン、アルタミラ、そしてマチルドである。前二者はパリ以外の他の世界を知っているが、マチルドは知らない。彼女はボニファス・ド・ラ・モールを熱愛し、彼が生きていた時代と現在を比較することで、状況を客観視しているのである。

しかしマチルドは意識の上では状況を客観視しえていても、現実にはこの状況に完全につかっており、矛盾としての彼女はこの深い《l'ennui》からの自己の解放を願っている。このことを理解しなければ、彼女の一切の言動は奇怪に思われよう。

さてこのマチルドの性格をまず把握しなければならぬが、ジュリアンが彼女の眼の表情からその性格を理解する興味深い一節がある。

(……) ils (= les yeux de Mathilde) annonçaient une grande froideur d'âme. Par la suite, Julien trouva qu'ils avaient l'expression de l'ennui

qui examine, mais qui se souvient de l'obligation d'être imposant.(……) c'était du feu de la saillie que brillaient de temps en temps les yeux de Mathilde (……) Quand les yeux de M^{me} de Rênal s'animaient, c'était du feu des passions, ou par l'effet d'une indignation généreuse au récit de quelque action méchante. (……) (233)

この引用文にはマチルドとレナール夫人の性格の相違が、眼の輝きのそれによつて的確にとらえられている。夫人の場合は「情熱の火」(du feu des passions)であるのに対し、マチルドにおいては「才知の火」(du feu de la saillie)である。つまり夫人の生き方はあくまで自己の心の動きに忠実なそれであるが、マチルドの場合は「才知」が彼女の生を支配する。さらにマチルドには幼い頃からの「お世辞」に養われた「自尊心」(un orgueil infini)があり、他人の侮蔑を決して許さない。

これらの性格はマチルドに《le naturel》を阻んでいる。彼女の言動は《anti-naturel》である。しかしそこにはひとを魅惑する洗練と優美がうかがえるのである。

そして最後にマチルドの性格を特徴づけるものとして何よりも「英雄主義」—ボニファス・ド・ラ・モール崇拝と結びついた《l'héroïsme》を認めねばならない。

(……) Le courage était la première qualité de son caractère. Rien ne pouvait lui donner quelque agitation et la quérir d'un fond d'ennui sans cesse renaissant que l'idée qu'elle jouait à croix ou pile son existence entière. (330)

次にそれではマチルドは周囲の青年たちをどのように眺めていたか。ここでは特に彼女の婚約者クロワズノワ侯爵を取り上げる。

彼は、ジュリアンにとって「パリの理想」と思われる当のマチルドに、「現代の教育の傑作」(le chef d'œuvre de l'éducation de ce siècle)と見なされている男である。マチルドが一切をそなえる女性であるように、クロワズノワも地位・財産・機知・人柄の良さ、つまりすべてをそなえている。ふたりの結ばれるのは、あらゆる点から見て当然である。

しかしマチルドにはそれが気に入らない。彼女にはクロワズノワと結婚した後

の生活が、たなごころを指すように分っている。すべてはあらかじめ敷かれた線路の上を進むだけである。彼女は自分の運命を翻弄するような冒険と偶然を望んでいるのに、クロワズノワについては、その話の内容さえすでに彼女には予測がつく。《l'ennui》からの解放を望みながら、未来はますます自分を深い《l'ennui》に閉じ込めるように思われる。

マチルドがこうしてクロワズノワに感じるもっとも大きな不満は「性格の強さ」(la force de caractère) が欠落している点である。「性格の強さ」がなければ、冒険も偶然も起こらない。

(……) Est-ce ma faute à moi (=Mathilde) si les jeunes gens de la cour sont de si grands partisans du convenable, et pâlisent à la seule idée de la moindre aventure un peu singulier ? Un petit voyage en Grèce ou en Afrique est pour eux le comble de l'audace, et encore ne savent-ils marcher qu'en troupe. Dès qu'ils se voient seuls, ils ont peur, non de la lance du Bédouin, mais du ridicule, et cette peur les rend fous. (297)

集団でしか行動できぬ人間には、思想の生まれようはずはない。シラーも「各人はこれをひとりひとりとしてみれば、かなり利巧で分別があるが、いっしょになると、たちまち愚か者となる」と言ったというが(G. ジンメル「社会学の根本問題」)、集団でしか行動できぬ人間を支配するのは単純な思考で、そこからは思想の生まれる余地はない。思想の生まれるためにはひとりで行動しうる「性格の強さ」が必要である。《l'insulaire naïf》と《l'héroïsme》の結合がなければ思想は生じない。

王政復古の時代の状況は、《le naturel》の特徴である《la spontanéité》を許さない。それは慣習を尊重する貴族階級の秩序を脅かすものだからである。ましてそれと《l'héroïsme》の結合にいたっては。

マチルドの悲劇はそのような状況の中で、ボニファス・ド・ラ・モールへの熱愛によって《le naturel》と《l'héroïsme》の結合のすぐれた前例を歴史に見出しながら、自身は《l'anti-naturel》と《l'héroïsme》の結合にとどまり、周囲にも《l'anti-naturel》しか発見できずにいる点にある。

ジュリアンがマチルドを取り囲む青年たちといかに相違しているかは、マチル

ドの観察もこれを明らかにしているがその相違の第一は《l'héroïsme》の有無にあるように思われる。それは思考の面にも次のようにあらわれている。

(……) Julien remarqua l'extrême influence que cet aimable et bon jeune homme (=Croisenois) supposait aux causes occultes. C'était au point qu'il s'attristait et prenait de l'humeur, s'il voyait attribuer un événement un peu important à une cause simple et toute naturelle. (…)

(349)

これに対しジュリアンは、シェランから正しく、簡明な推論を学び、ナポレオンから意志の力を教わり、このふたつの原理の上に自己の生活を展開している。獄中での「神」に関する思索に見られるように、彼は「神秘不可解な原因」なぞ認めない。一切は彼の理性と意志の前に明瞭でなければならず、もしそれが不可能であるとすれば、彼の理性と意志が弱小であるからに過ぎない。

マチルドが自分を取り囲む人物と比べて、ジュリアンを《singulier》と感じたのは、あきらかにこのような思考の面にすらあらわれる《l'héroïsme》を認めたがためである。しかし彼女がジュリアンの二重性、特に彼の《le naturel》の面にどれほど理解があったかは分らない。というのは獄中でのジュリアンが孤独を楽しんでいるのと、マチルドは聞わねばならなかったと書かれているからである。マチルドにはジュリアンの《le naturel》など本質的には問題とならなかったのである。

ところでジュリアンのような《l'héroïsme》を帯びた精神が、幾度かマチルドの「自尊心」を狼狽させたとき、すでにマチルドのジュリアンに対する恋愛感情は触発されていた。ジュリアンには周囲の青年たちと違って「性格の強さ」がある。出身はいやしい階層でも、自分にはそれが月並みでなくおもしろい。そして彼ならば自分を深い《l'ennui》から救い出してくれるだろう。その理性は考えて、彼女に恋を命じたのである。

ジュリアンにとってもマチルドは自尊心を刺激せずにはいない対象である。ジュリアンにはレナール夫人はふたりあったが、マチルドはひとりである。すなわち「ラ・モール侯爵の美貌の娘」というのが、ジュリアンの眼に映っているマチルドで、彼にはそれ以外のマチルドは考えることすら出来ない。

このようにマチルドとジュリアンの恋は、《l'anti-naturel》と《l'anti-naturel》のそれであり、そこには「情熱恋愛」のもつ第一の特長《l'imprévu》は見られない。レナール夫人との恋の場合、夫人にそしてときにはジュリアンにも（最後の方ではジュリアンもまったくそうであるが）情熱が生み出す《l'imprévu》が存在したが、マチルドとの場合はそれがあってもごく一瞬である。後者にあつては《modèle》《conscience de soi》《imiter》などといった言葉によって、その内容が理解できる。たとえば、彼らの恋愛については次のように書かれている。

A la vérité, ces transports étaient un peu voulus. L'amour passionné était encore plutôt un modèle qu'on imitait qu'une réalité. (327)

ジュリアンは恋の幸福を感じるために、自分の相手がいかなる身分にあり、どれほど青年貴族たちの憧れの的となっているか理性の力を借りて考え、自尊心を満足させねばならぬのである。

そしてマチルドの方でもジュリアンを次のように見ている。

(……) sa pensée traitait un peu Julien en être inférieur, dont on se fait aimer quand on veut. (338)

マチルドはレナール夫人のように、ジュリアンをその存在自体から愛しているのではない。そしてマチルドの愛に、《le naturel》と《l'anti-naturel》の二重性を持つジュリアンは《l'anti-naturel》によってしか対することはできなかったのである。彼らは自分たちの恋愛によっては、真の幸福も真の喜びも感じない。それは彼らが内なる《l'insulaire naïf》を解放できぬからである。

さてしかしジュリアンが手に入れたはずの愛は、たちまち彼女の「自尊心」の仕業によって失われる。マチルドはジュリアンの姿を見ると、悪意のこもった態度を見せながら彼にこう言うのである。

J'ai horreur de m'être livrée au premier venu (……) (331)

この言葉はジュリアンの自尊心を傷つけるが、彼の恋情はそれによって燃え上

る一方である。そして恋の駆け引きについては無知に等しい彼は、卒直にマチルドに自分の苦悩を訴える。しかしそれはマチルドのような人物に対しては、コラゾフの言うように、自分がつまらぬ人間であることを示すことに他ならない。

ジュリアンはコラゾフの指示に従って、マチルドとは一切口を利かぬ努力をする。

そしてある日、「セント・ヘレナ日記」を読みながら、マチルドの心を征服する手段を思いつく。それは《LUI FAIRE PEUR》——「敵を恐怖さす」ことであった。つまりマチルドのように無限の自尊心を持つ人間には、つねに自分は本当に愛されているかという根本的疑問を持たせておかねばならぬというのである。

この発見はジュリアンに完全な勝利をもたらす。マチルドはついに彼の子供を身ごもるのである。ジュリアンはこうつぶやく。

Après tout, (……) mon roman est fini, et à moi seul tout le mérite.
J'ai su me faire aimer de ce monstre d'orgueil (……), son père ne peut
vivre sans elle et elle sans moi. (427)

しかしジュリアンは野心の満足は得ても、ある深い空しさを覚えていたはずである。その空しさはいつか必ず爆発せねばならなかった。そしてジュリアンにあってはそれはただちに到来したのである。

レナール夫人の曝露の手紙がラ・モール侯爵のもとに届き、ジュリアンの未来は暗黒に塗りつぶされた。ジュリアンは夫人を殺害しようとする。ヴェリエールの教会の新築の御堂に二発の銃声が響き、夫人はぱったりと倒れた。——しかしまさにこの瞬間、ジュリアンの内において《l'insulaire naïf》は《l'amant de la gloire》を殺害したのである。

第四章 獄中にて

「赤と黒」全体における獄中のジュリアンの記述は、Ⅰ部Ⅱ部合わせて七十五章のうちの十章にすぎない。しかし全体の七分の一にも満たないこの部分と他の

残りは、その内容におき優に釣り合っている。否、むしろ、聖書にあって新約のそれが占めるような位置を、この牢獄の十章は持たされていると言って過言でない。

ところでこの重要な部分の分析にかかる前に、実はジュリアンが牢獄に入る原因となったレナル夫人狙撃事件について、われわれは幾つか問題をかかえている。1) W・S・モームなどの指摘に代表される(「世界の十大小説」)、ジュリアンが夫人を殺害しようとしたのは小説全体から見て妥当でないという批判の、当否に関する問題。2) そしてジュリアンのこの行為はいかなる意味と結果を持つかの問題、などである。しかしこれらの問題については、他日詳細な考察を試みることとして、今は次のことを指摘するにとどめる。

少くとも作者はこの事件を通して、ジュリアンにふたつの重要な転換を要求している。

すなわち

- 1) ジュリアンの意識された「幸福」の内容が「立身出世」から、孤独・夢想などによって特徴づけられるそれに転換されること。
- 2) ジュリアンの二重性が克服されて、彼が《le naturel》そのものに転換されること。

そして以上の変化にもかかわらず、この事件の前後に共通しているのは、彼の《l'héroïsme》である。

われわれは牢獄に入ったジュリアンが、あたかも水を得た魚のように生き生きとし、幸福に対し人並み外れた喜びを感じるのを見る。

(……) Il était encore bien jeune; mais suivant moi, ce fut une belle plante. Au lieu de marcher du tender au rusé, comme la plupart des hommes, l'âge lui eût donné la bonté facile à s'attendrir (……) (442)

ジュリアンは牢獄に入れられ、マチルドに復讐を果たした旨手紙で告げたあと、こう思った。

(……) Je n'ai plus rien à faire sur la terre. (……) (436)

それは彼がラテン訳「新約聖書」・メストル著「法王論」を暗記しつつあった頃

からすでに抱いていた「野心」を失い、真に《le naturel》にめざめたときであった。以降ジュリアンの関心は、もっぱら己れの内面からの一切の偽善の排除に向けられる。

ところで「赤と黒」第Ⅱ部冒頭にサン・ジローという芸術家肌の人物が登場するが、彼はこの小説を絵にたとえるならば、主人公ジュリアンの背景にあって、主人公を引き立たせるためにのみそえられるあの人物である。彼は偽善に満ちたパリの生活にあき、田園の平安と素朴な心を求め田舎にゆくが、そこに見い出したものは「偽善と中傷の地獄」であった。そして孤独と静けさをあくまで求める彼は、それが存在するフランス唯一の場所「シャンゼリゼ通りに面する五階の部屋」へとゆくのである。

この人物は小説に描かれている限りにおいては、芸術家肌の《le naturel》と考えてよさそうである。ところで第一章においてアルタミラとの比較を通じ述べたように、ジュリアンは芸術家としての資質を十分持ち、かつ偽善に対し烈しい憎悪を示す点で、このサン・ジローに類似している。しかも孤独を愛し、「シャンゼリゼ通りに面する五階の部屋」以上に外界から遮断された、「牢獄」に入るのを喜ぶのである。

それではこのサン・ジローとジュリアンの相違は、どこにあるか。それは社会に対する両者の姿勢に明瞭にあらわれている。すなわち、ジュリアンはヴェリエールの貧しい製材所の息子として育ち、己れの意志と才能とによってのみ当時の社会を縦断し、「野心」によって要求される《l'anti-naturel》を克服することで《le naturel》にたどりついた人間である。その孤独は、敏捷な若い猛禽が地上の試練をへて、真の己れの力にめざめ、眼下に世界を見降ろしつつ雄飛する姿を思わせる。これにひきかえサン・ジローの場合は、ひたすら濁世を避け、自己の清廉を守り、詩歌管弦の遊びにふけった東洋の隠者に似る。ジュリアンの場合は、社会が自己の内面的成長の契機として利用されたのに対し、サン・ジローにおいては、社会はたんに拒絶されるべきものでしかなかったように思われる。

ジュリアンの地上の試練をへてのこの「超脱」(détachement)の姿勢は、彼が監禁される建築物にも象徴される。眺望の利く、美しいゴシック式天守閣百八十段の高さの部屋——それはジュリアンという猛禽の《la force》と《l'isolement》にもっともふさわしい場所である。

さて獄中のジュリアンは、これまで「野心」の実現のためにそそいできた全精力

エネルギー

を、自己の内面からの偽善の除去、すなわち無限の《le naturel》の追求に振り向ける。この「赤と黒」を通じての圧巻である獄中でのジュリアンの精神の軌跡を、われわれは「死」・「神」・「英雄主義」の三つの問題に分ち論じることとする。

(1) 「死」

少くともわれわれ読者には、ジュリアンの態度は牢獄に入ってからでも、以前にまして鮮明であり、レナール夫人発砲事件が明瞭な意識のもとに行われたことを認める。彼は事件の公判でも次のように述べる。

(……) Mon crime est atroce, et il fut prémédité. J'ai donc mérité mort. (……) (463)

この不敵ともいえる態度の中にわれわれは、彼が自己の行為を社会的・法律的尺度ではなく、むしろ意志の次元でのみ測ろうとしているのを見る。すなわち彼にとって問題は、それが社会的・法律的に犯罪であるか否かではなく、どれほど徹底して己れの意志を実現したかにある。こうしてジュリアンは自己の死をすら、自己の意志で選択する。これまで「野心」にそそがれた彼の意志は、「死」という絶対に振り向けられたのである。——「死」という宇宙に向かってどれほど高く飛翔するか、そのみが彼の問題だった。

Ce (=la mort) sera là mon thermomètre. (……) (441)

そして牢獄はこの「死」にのみ向ってひらかれた孤独の空間である。社会の一員として生きていたとき、最下層の出身であるジュリアンは己れの幸福のために「野心」を抱き、その実現のために「偽善家」として行動しなければならなかった。だがこの孤独の空間においては自己の内面のみがあざやかに浮ぶ。

ジュリアンは獄中で自己の人生を次のように振り返る。

(……) le mérite simple et modeste a été abandonné pour ce qui est brillant. (……) (466)

それでは断頭台の露と消えるまでの残り少ない日々、ジュリアンは何を喜びとして生きたか。「夢想」——レナール夫人とともに暮した美しいヴェリエールやヴェルジーの追憶。

烈しい感受性にめぐまれたジュリアンはこの「夢想」のうちに、何らの偽善にも汚されない幸福を見出したのである。

Il est singulier (……) que je n'aie connu l'art de jouir de la vie que depuis que j'en vois le terme si près de moi. (456)

そして今のジュリアンには表現は平凡でも、真の感情のこもったもののみが心を打つ。他人を意識した言動、わざとらしさ、それらは彼の胸をむかつかす。

マチルドの人騒がせな犠牲的行為、そしてフーケまでも獄中のジュリアンを苛立すことがある。それはフーケの《le naturel》が究極ブルジョワ道德の範囲を出ず、ジュリアンのような己れの意志以外に自己を律する尺度を持たぬ人間の「幸福」は理解出来ぬからである。

ついにジュリアンは次のような言葉すら吐く。

Le pire des malheurs en prison, (……) c'est de ne pouvoir fermer sa porte. (……) (476)

しかしこのようにあくまで孤独の喜びにひたりながらも、ジュリアンは一方で人々に対する深い愛情にめざめていったように思われる。レナール夫人を殺そうとしたことの深い後悔、フーケの友情に対する感謝、父親に対する同情、さらにラ・モール侯爵とマチルドに対する自責の念。けれどもジュリアンのこのような心に真に応えうるのは、レナール夫人の純粋な愛だけだったのである。

(2) 「神」

ところで「死」を前にして、自己の内面から徹底して「偽善」を排しようとしたジュリアンは、彼が「偽善」を生み出す最大の温床と見ていた宗教をどのように考えたか。

ジュリアンの神に対する態度は、第一章でも少しく触れるところがあったが、

しかし彼は完全な「無信仰者」(incrédule)であったのか。彼はシェラン、ピラールの神と自己の良心にのみもとづく生き方に敬意を払っているし、アルタミラなどのジャンセニストたちの純粋な信仰に感銘を受けている。そして彼の次の言葉は見逃すことができない。

(……) Qu'importent les hypocrisies des prêtres ? peuvent-elles ôter quelque chose à la vérité et à la sublimité de l'idée de Dieu ?
(437)

クロード・ロワは、スタンダールは反宗教的だったのではなく反僧侶階級的だったのだと述べているが(《Stendhal par lui-même》), この言葉は無論ジュリアンにもあてはまる。ジュリアンの認める信仰は完全な《l'insulaire naïf》のそれであり、偽善と退廃につながる《l'amant de la gloire》の信仰は許すことができない。

ジュリアンの論理はさらに徹底される。彼に言わせれば、この世に「自然法」(droit naturel) なぞ存在しない。

(……) Il n'y a de droit que lorsqu'il y a une loi pour défendre de faire telle chose sous peine de punition. Avant la loi, il n'y a de naturel que la force du lion, ou le besoin de l'être qui a faim, qui a le froid, le besoin en un mot … (……) (479)

「法」(loi) 以前に「自然的なもの」(naturel) としては「欲求」(besoin) しかないとすれば、いかなる行為もその「欲求」から発するのでなければなるまい。そして「信仰」もその例外でありえない。パウロのような聖人の信仰だって、自尊心の満足で報われていたのではないか。してみると他の人間たちの信仰が、「偽善」に汚されていないはずはない。このように、ジュリアンにとっては真の信仰は実は不可能と見えるのであり、あるとすればそれはゴシック式大聖堂の「焼き絵ガラスの窓」(vitraux) に描かれた、僧侶の胸に燃えているとしか考えられない。

しかしジュリアンは「神」の存在を否定しているのでは決してない。もしそのような巨大な意志があるとすれば、「蟻」のような人間にとって「獵師」のようなものであろう。「蟻」には巨大な「獵師」の思考も行動も理解を絶する。

…… Ainsi la mort, la vie, l'éternité, chose fort simples pour qui aurait les organes assez vastes pour les concevoir … (481)

そしてもしこのように巨大な器官を持つ「神」という存在があるとしたら、聖書に照してみれば限り、自分のこれまで犯した罪は重く、到底救われる見込みはない。また死後の世界も神も存在しないとすれば、この世の幸福を可能な限り享樂するにしくはない。ジュリアンからすれば、神が存在してもしなくても、自分には現世の幸福しか許されないのである。

この議論は奇妙にわれわれにパスカルの「賭の理論」(ラフュマ版パンセ418)を想起させる。ジュリアンはパスカルの理論を逆用し、神の存在非存在にかかわらず、たとえ有限の幸福であっても、それを楽しむ他ない自己を確認する。

ところでそのジュリアンが賭けるべき有限の幸福とは何であったか。それはレナール夫人とともにある幸福である。

スタンダールの幸福は、それはまず何よりも感覚の幸福である。そしてその感覚の幸福の最大のもののひとつは、彼にとって、「恋愛」であった。「恋愛論」〈De l'amour〉二章にその定義がある。

Aimer, c'est avoir du plaisir à voir, toucher, sentir par tous les sens et d'aussi près que possible un objet aimable et qui nous aime.

ジュリアンがピストルで撃ち倒したレナール夫人は、傷も浅く、やがて快癒すると牢獄のジュリアンを訪れる。

(……) Il fut éveillé par des larmes qu'il sentait couler sur sa main.

(……) Il entendit un soupir singulier ; il ouvrit les yeux, c'était M^{me} de Renal. (471)

牢獄のジュリアンはすでに「野心家」で「偽善家」のジュリアンではない。おどおどとしてレナール邸の門口の呼び鈴すら鳴らすことができずにたたずんでいた、あのジュリアンである。そしてジュリアンの眼に映るレナール夫人は、自分をわが子のように愛してくれたやさしい自然の結晶のような女性である。夫人とジュリアンはここに〈l'insulaire naïf〉と〈l'insulaire naïf〉として、至福の再会

を遂げる。

われわれはジュリアンに母親のないことを、この上なく羨望する。彼にとって夫人は恋人であると同時に母である。しかも夫人はヴェリエールやヴェルジューのあの美しい自然の結晶のような女性である。思うにジュリアンは、夫人に自然を、宇宙を、生まれてきた意味の一切を見たであろう。

このときジュリアンは夫人のうちにおのれの「神」を見たはずである。無論、夫人もそうだったのである。

(……) Je sens pour toi ce que je devrais sentir uniquement pour Dieu: un mélange de respect, d'amour, d'obéissance. … En vérité, je ne sais pas ce que tu m'inspires. Tu me dirais de donner un coup de couteau au géôlier, que le crime serait commis avant que j'y eusse songé. (……)
(472)

ジュリアンはもはや「他者」に語りかけるようには語らない。夫人とジュリアンとは、プラトンの「饗宴」の中でアリストパネースが語る、あの「男女両性者」^{アンドロギュノス}の神話を思わせる。

(……) je te parle comme je me parle à moi-même (…)(473)

彼らにあっては互いが互いの「神」となっているのである。

(3) 「英雄主義」

われわれはこれまで三人の人物に英雄主義を認めた。すなわち、マチルド、アルタミラ、ジュリアンである。マチルドの英雄主義は彼女の《l'anti-naturel》と分ちがたく結びついていた。

(……) il fallait toujours l'idée d'un public et des autres à l'âme hautaine de Mathilde. (451)

そしてアルタミラのそれは《le naturel》と結びついていると考えられたが、彼

は最終的に革命家としての性格をあらわした。

これに対し、ジュリアンは《le naturel》と《l'héroïsme》の結合という意味では、他の人物たちよりもアルタミラに類似しているが、究極的には「芸術家」としての相貌をあらわに見せていた。

ところでこの三人の人物の他に、われわれはレナール夫人にも、情熱がときどき驚くような大胆な行動をとらすのを見る。そしてそれはマチルドのようなわざとらしきをとまなわず、ジュリアンの心を打つ。レナール夫人のようなつましい女性にあっても、情熱は彼女を駆って「英雄主義」にまで到らすのである。そしてそれはマチルドの場合と違って、ひたすらな愛する者への献身的行為となつてあらわれる。

さて牢獄におけるジュリアンの、孤独な、芸術家的英雄主義の頂点は、彼の死の寸前に訪れた。

Jamais cette tête n'avait aussi poétique qu'au moment où elle allait tomber. Les plus doux moments qu'il avait trouvés jadis dans les bois de Vergy revenaient en foule à sa pensée et avec un extrême énergy.

Tout se passa simplement, convenablement et de sa part sans aucune affectation. (487)

結 論

ジュリアンの人生の軌跡は、眼にしみるようにあざやかである。この男の人生に、遡巡らしい遡巡、迷いらしい迷いは一切あらわれたことがない。

彼は生前マチルドに、次のような言葉をもらしたことがある。

(……) les passions sont un accident dans la vie, mais cet accident ne se rencontre que chez les âmes supérieures …… (……) (453)

われわれはマチルドの魂には、この「情熱という事件」は生じなかったと言わざるを得ないが、ジュリアンとレナール夫人は違う。夫人には、ジュリアンに対

するあまりに烈しい愛というかたちで、ジュリアンには、レナール夫人への愛、そして何よりもあの内面の無限の追求という芸術家に特有の意志として、「情熱という事件」は起こったのである。そしてこのジュリアンの情熱を、スタンダールも共有した。ジュリアンは、よくいわれるようにスタンダールの分身には間違いない。

ところでそれなら、作家スタンダールはジュリアンの《l'héroïsme》も共有していただろうか。たとえばスタンダールは《Racine et Shakespeare》の中で次のように述べている。

Il me semble qu'il faut du courage à l'écrivain presque autant qu'au guerrier; l'un ne doit pas plus songer aux journalistes que l'autre à l'hôpital.

このように語る作家の《l'héroïsme》を持たぬはずはない。

さてつねに読み終えられた小説というものは、われわれにとって現実のはじまりを告げる鐘でなければならない。偉大な精神の軌跡を眼にしたわれわれは、そこから汲みとり得るだけの知恵を汲まねばならない。

われわれが主人公ジュリアンやレナール夫人をどのように見るか、そしてそれが何を意味するかは、スタンダールのような小説家にあつては、すでに暗黙のうちに答えられている。われわれはどのようにジュリアンやレナール夫人を見るかによって、マチルドになりアルタミラになり、時にはヴァルノ、ソレル老人、さらにはレナール夫人にもジュリアンにもなる。そしてジュリアンやレナール夫人の眼にわれわれの眼が近接するとき、われわれは《the happy few》と呼ばれるであろう。

スタンダールの場合、読者というものはあらかじめスタンダール自身によって選択されているのだ。しかもその選択にあずかった少数者は、ジュリアンやレナール夫人の喜びや悲しみを共有するばかりか、スタンダールの魂のそれをも共有するのである。

テキストは Garnier 版 P.-G. Castex 校訂《Le Rouge et le Noir》を使用した。
《Le Rouge et le Noir》からの引用は()内にその頁数を記した。

なお参考文献は、

Francine Marill Albérès: 《Le Naturel chez Stendhal》 Librairie Nizet

Paul Valéry: Oeuvres I Bibliothèque de la Pléiade

Alain: 《Stendhal》 Presse Universitaires de France

Maurice Bardèche: 《Stendhal romancier》 La Table Ronde

Jean Prévost: 《La création chez Stendhal》 Mercure de France

Claude Roy: 《Stendhal par lui-même》 Ecrivains de Toujours

Aux Editions du Seuil

Georges Blin: 《Stendhal et les problèmes du Roman》

Librairie José Corti